



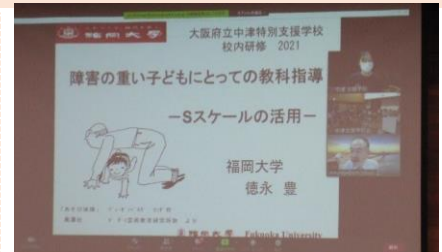
自立活動だより



自立活動部
R3年11月号
第4号

今号では、夏休みに行われた第3回 校内自立活動研修会にて、徳永先生に講演いただいた内容を振り返り、改めて「学習到達度チェックリスト(Sスケール)」の活用についてお伝えします！

徳永 豊先生 (福岡大学 人文学部 教育・臨床心理学科教授)
心理リハビリテーション SV、臨床心理士、公認心理士の資格を有し、特別支援教育や発達臨床を専門としている。「学習到達度チェックリスト(Sスケール)」の活用方法や、障がいの重い子どもの目標設定・学習評価について、全国の支援学校等でセミナーや公演活動を行っている。



これまでの「重度・重複障がいの子どもの教育」

主に「身体の動き」や「コミュニケーション」等の自立活動の指導が中心になることが多かったが、実践の中で重要な課題となったのは、「教師の働きかけに対して、子どもが起こした行動をどのように評価するのか」ということや、子どもの実態について、教員間や保護者とで共通理解をするための枠組みが不明確であるということだった。

学習到達度チェックリスト(Sスケール)

☆障がいの重い子どもの到達度を把握し、適切な目標設定を実現するための羅針盤。
☆教科等の学習に遅れのある子どもの学習評価を可能にする。

特徴① チェックリストの横軸：教科

必要に応じて各教科の指導を自立活動に置き換える場合もあるが、学校教育の基本は国語や算数などの教科指導であり、障がいが重度であっても、★教科の視点で授業を展開していく必要があるという考え方。国語であれば、「人とのつながり」、算数であれば「物とのつながり」に置き換えることが可能★

特徴② チェックリストの縦軸：発達

基本的には、どの児童生徒においても、定型発達の道筋を辿り発達していくため、誕生からの発達を踏まえて把握し、目標を設定していくことが重要という考え方。これまでの体験や、これまでの行動を把握することで、学びの積み重ねを明らかにすることができる。

◇まとめ◇

実態把握を行う中で、子どもの実態の捉え方に教員間で違いが出るのは当然であり、大切なのはその違いの部分を教師同士で一緒に確認していくことです。擦り合わせの協議こそが、子どもの実態をより深く、的確に把握することにつながります！縦軸の伸びだけではなく、横軸への広がり(特定の人だけではなく、教師が変わってもできる等)、「今できていることのレベルを確かにしていくこと」も重要な点です。Sスケールの発想は、小学校1年生の国語や算数に至る前段階の「教科の基礎」も、教科として位置付けるという考え方です。授業において、改めて「教科の視点」を取り入れた実践を意識していきましょう！

書籍紹介



- ① 障害の重い子どもの発達理解ガイド 教科指導のための「段階意義の系統図」の活用 /徳永豊 編著
- ② 障害の重い子どもの目標設定ガイド 授業における「学習到達度チェックリスト」の活用 /徳永豊・田中信利 編著
- ③ 障害の重い子どもの目標設定ガイド 第2版 授業における「Sスケール」の活用 /徳永豊 編著

参考文献・資料

- ① 令和3年度第3回自立活動研修資料 講師：徳永 豊先生
 - ② 『障害の重い子どもの目標設定ガイド 授業における「学習到達度チェックリスト」の活用』
 - ③ 慶応義塾大学出版会 HP 「Sスケール」情報提供サイト <https://www.keio-up.co.jp/kup/gakutatsufaq/>
- ※③は研修会のお知らせや、Sスケールの活用における Q&A 等も載っていますので、是非一度ご覧ください！